

千葉日報社長賞

むらい まさお
村井 正雄

亡き妻を偲んで

妻が逝去して既に六カ月になる。

私の目の前で突然倒れて、そのまま帰らぬ妻となった。

妻との出会いは、私が中学校2年の頃であった。

私たちは従妹同士で、よく妻の家に遊びに行った。

当時、私の友達と妻の友達も年中妻の家に集まり遊んだのであった。

私がC高に通い、一つ下の妻がC二高に通う頃は、私は毎朝、彼女の家に行き、連れだって学校に行ったものである。

MN高の学生や、C高の学生も妻に目をつけていたが、村井がいるからと、誰も手出しをしなかった。

当時、私はC高の応援団長をしていて、その頃は番長と皆が一目おいていた。

又、妻の家族も私の家族も当然、その交際を認めていて、いつか二人が一緒になるだろう、と思っていた。

その間二人は、互いに手紙のやりとりをしていたのは当然のことで 中学生の時から交際が、そのまま結婚に結びついて いった。

三人の子供に恵まれ、楽しい家庭であったが、突然の妻の死を目前にして 今でもどこかで生きているのではないかと、毎日、朝、昼、夜と仏壇の妻の位牌と、写真に手を合わせ線香をたむけている。

八十八才の祝いを、二人で一緒にしようという夢は消えてしまった。

今の私は、ただただ妻の写真に手を合わせ、いろいろ語りかけているだけである。

妻はどこに行ってしまったのだろう。

終

(千葉県／82歳)

社会福祉法人愛の友協会